

氏名(国籍)	金 柰 灵 (大韓民国)
学位の種類	博士(文学)
学位記の番号	甲27
学位授与年月日	2012年3月15日
学位授与の要件	学位規定第20条 2項該当 文学研究科(日本文学専攻)
論文題目	太宰治のパロディ作に表れる人物描写と価値観に対する一考察 —『新釈諸国噺』と『お伽草紙』を中心に—
論文審査委員	(主査) 梅光学院大学 教授 奥野政元 (副査) 梅光学院大学 教授 中野新治 (副査) 梅光学院大学 客員教授 佐藤泰正

論文要旨

明治42年6月19日、青森県生まれの小説家である。東京大学在学中、左翼運動に参加し、しばらくして脱退をした。小山初代との同棲により、家族から分家除籍をされたが、初代の過失を知るなどして、心中未遂の後、別れた。しかし、恩師井伏鱒二から紹介された縁談の話を受け入れ、昭和十四年一月八日、井原美知子と正式に夫婦となり、新しいスタートをしようとした。

しかし、丁度その時期は十五年戦争の最中であり、太宰は作家として意志を曲げずに作品を書き続けていたことは周知のことであろう。人々は国家により、抑圧されていた。全てが統制されていたその際、文学界も同じく検閲というのがあり、検査済みの書籍だけが出版される時期でもあった。日本精神を強調する「日本回帰」というブームも発生した。太宰は国家の目を逸らすためにも、その気流に巻き込まれ、古典を材料にし、パロディ作を書いていたのである。太宰は、「十五年間」(21年4月)という作品に《『新釈諸国噺』といふ短編集を出版した。》それから、《『お伽草紙』を作り上げた。その時に死んでも、私は日本の作家としてかなりの仕事を残した》と書いている。『新釈諸国噺』と『お伽草紙』を中心に考察しようとした私の動機もそこにある。不安と恐怖の中で、太宰は何を伝えるために、時流にも屈せずに書き続けたらうか。二作全部、同時代批評は激賞の批評ばかりであった。例えば、増田四郎¹は《『お伽草紙』は、しかし、「新釈諸国噺」よりも一層、奔放である。》と述べていた。多くの論文を踏まえながら、原典照合をまとめた上で、太宰のオリジナルを中心に《日本の作家精神の伝統》と《かなりの仕事》

1 山内祥史編『太宰治著術総覧』(東京堂出版、平成九年九月)

を一緒に繋げて考えてみたい。

はじめに、『新釈諸国噺』から見てみよう。よく言われている指摘は戦争批判、「笑い」、主人公に太宰的な影があるという三つの論に分けることができる。しかし、原典照合をしてみたら、太宰の方が、内容の面ではあまり原典を離れずに、登場人物の詳細な描写と心理描写をすすめていて、見事であった。それで、その登場人物を中心に三つに分け、進めてみた。一つは「何が駄目であったか」、二つは「何を求めていたか」三つは「何を捨てればよかったか」というテーマである。「何が駄目であったか」というのは何であろうか。五作「貧の意地」、「大力」、「破産」、「裸川」、「粹人」に共通していることは主人公たちがその場を逃れるために《嘘》をつくことであった。一両が無くなり、自分のせいにした〈原田〉、弟子に負けそうなので《一人前》になったと《嘘》をついた〈鰐口〉、家の金が無くなることも知らずにまわりの《お世辞》に酔い、お金を下ろしに来た客に金庫には金がたくさんたまっていると、客を騙す〈亭主〉、川から拾ってない金を拾った振りをした〈浅田〉、借金取りに逃げられていても、そういうわけがないと、家内が妊娠中だから、邪魔物になりそうなので、逃げてきたと、《嘘》をついた〈男〉がそれである。この人物らは《正気》を失っていた。《お世辞》に甘え、《ありのまま》のことが見えなくなり、許されるはずもない《嘘》までついて、知らない振りをしていた。《ありのまま》の自分と向き合っていないことが分かる。

二つは「何を求めていたか」である。四作「猿塚」、「人魚の海」、「赤い太鼓」、「遊興戒」に共通しているのは《信じる力》が欠けていたことである。〈お蘭〉と結婚するためにすぐに改宗した〈桑盛〉、自分が人魚を射殺したにもかかわらず、自分が本当にやったのか疑いはじめる〈中堂〉、借金がある仲間のために、金を集めてくれた彼らを疑いはじめる〈女房〉、遊びの果てに、ああいう風に卑しくなることを恐れている浪人仲間、でも、自分の生きる道が人からどう言われようが、自分が選んだ道を最後まで追求していく〈利左〉。つまり、彼らには《信じる力》が足りなくて、トラブルが発生したのである。《信じる力》があったら、何も起こらずに済んだはずであり、自分が選択したからには、最後まで粘って《信じる力》を持って、歩いていくべきではないだろうか。四作から《信じる力》への願望が見えてきた作品であった。

三つは「何を捨てればよかったか」である。三作「義理」、「女賊」、「吉野山」の共通点と言えば、素直になれずに《乱暴》《我儘》《欲》に包まれて、人生を送っていたことである。《我儘》の〈森岡丹三郎〉、名誉以外には頭はない〈瀬越〉の義理の父、《欲》が深すぎて悩んでいる僧侶などがそれである。要するに、『新釈諸国噺』の「凡例」で言う《日本の作家精神の伝統》というのは《我儘》も程度がすぎれば、《乱暴》さになるように、物事にはほどほどがあり、《嘘》をつかず、《ありのまま》に、素直になること、欲心も捨て、自分自身をはじめ、他人のことを信じていくのが、太宰が彼らを通して、伝えようとしたメッセージではなかったか、進んで、作家の大事な精神の一つに繋がる問題ではなかったかと判断した。

引き続き、『お伽草紙』について考えてみよう。この作品は『新釈諸国噺』のように部分的な

改作ではなく、完全な太宰の『お伽草紙』に完成された作品であった。従って、登場人物を中心に、この作品を事実譚で捉えていいか、それから、「起承転結」で読んでいいか、最後は主人公の「異界」訪問譚というテーマで捉えるという順に考えてみた。はじめにこの作品は事実譚であったのだろうか。本文をよく読んでみれば、《この父》は《やうである》という形で話を進め、第三人称の〈父〉が語り手であった。昔話の設定場所も推量表現によく使われている日本語を使っていた。従って、〈父〉なる人が空想に頼って、《別個の物語》として《醗酵》していることから、事実譚として捉えるのは無理があると考えた。

二つは「起承転結」の検討である。『お伽草紙』を「起承転結」の四部構成になっているとする説に対して、本稿では一人一人の登場人物の描写を詳しく解釈し、違う方向で考えてみた。初めは「瘤取り」爺さんである。右瘤爺さんは何故、瘤を取られ、左瘤爺さんはかえって、つけられたのだろうか。それは《親和の情》を抱いているかいないかによって変わるものであった。右瘤爺さんは最初から《親和の情》で鬼と向き合っていたが、左瘤爺さんは何かされたら、鬼を殺すつもりで鬼と向き合っていて、運命が決められたのであった。次は「浦島さん」である。〈浦島〉は批評が嫌いな《風流人》であった。彼にもってこいの竜宮に行って、〈乙姫〉の《聖諦》を知ってしまう。それを聞いてから、〈浦島〉は《信じる力》を持って、陸上で人と向き合いたくなったのであった。次は〈狸〉が死ぬ直前に《惚れたが悪いか》を言い残し、死ぬ内容で有名な「カチカチ山」である。なぜ、〈狸〉は死ななければならなかったのだろうか。それはお婆さんを殺してもいないのに、偉そうに〈兎〉にお婆さんをやっつけてきたと《嘘》をついたのが原因であった。それを聞いた瞬間から自分の《敵》であると、むごい女に変わったのである。《一国の主宰》になった「舌切雀」の〈お爺さん〉の長所は『無関心』、『無欲』であった。しかし、それをそのまま受け入れていいだろうか。日頃は〈お婆さん〉とあまり会話らしい会話もしていない〈お爺さん〉が〈雀〉から手土産を貰ってきたけど、なかなか重くて、小さいものを取ってきたとかわいそうに話す。すると、〈お爺さん〉のためなら何でもできる〈お婆さん〉だから、代わりに貰ってくる途中で凍死して死んでしまい、その金は〈お爺さん〉の財産となった。

三つ目に注目したのは世間嫌いで、孤独な弱い登場人物が、「異界」という所に行ったことである。「カチカチ山」を除外すれば、三作全部「異界」を訪問してきた。「水」のあるところの、ぱっと明るく、または哀れな感じの「異界」を経験していた。勿論、「水」というのは水道水ではなく、《清水》であっただろう。《清水》のあるところを訪問してきた彼らは金持ちになったり、長生きしたり、瘤が取られるなどプラス的な効果を得てきた。その理由は「異界」における《清水》による浄化作用のためであると考えた。要するに、《「禊」は「みそそぎ」の略語で「み」は「水」または「身」を意味し、「そそぎ」は「注ぐ」という意味》で説明できるだろう。心身の穢れを「水」できれいに流したり、「禊」といって、心身の穢れを泥などに託して、穢れも落としたりする意味であった。このせいか彼らは変わってしまったのである。

『新釈諸国噺』と『お伽草紙』は一見読んでみれば、何の共通点も無さそうな古典パロディ作

であった。しかし、《かなりの仕事》を残し、《日本の作家精神の伝統》をわかってほしいという作者の願望が筆者には伝わってきた。考えてみれば、生きること自体が煩悶との戦いであろう。しかし、それを乗り越えるしかないのが人生であるかも知れない。その人生において一番いい手引きは絶対に《嘘》を付かずに、《欲》を捨て、《我儘》を維持しながら、信じて、《ありのまま》の道を歩くことであっただろう。それに《聖諦》をした上で、《親和の情》を持って、《無関心》の姿勢で他人と共に、自分と向き合っていくのが彼らの清らかな価値観であり、進んで、《日本の作家精神》であったかも知れない。文学の可能性として、この時代を生きていく価値観樹立の試みという意味で、この二つの作品は文学の光であったと思う。

審査結果報告（奥野政元）

金氏の論文は、太宰治の中期諸作品をめぐり、その特色を解明しようとしたものである。通常、太宰の中期世界は、前期の自己破滅的な作風から一転して、人間への愛と信頼を美しく描きあげた佳作が多く、最も安定した作風を展開したと言われている。しかもこの時代は、日本が近代化のはてに引き起こした所謂15年戦争の渦中でもあって、国家の存亡が問われた最も危機的な時代であった。言論統制による思想弾圧のもと、多くの作家が翼賛体制に、強制的にあるいは自ら進んで従った状況のもと、太宰の信頼と愛情に満ちた明るい作品は、他の作家の追隨を許さないほど独自のものであった。

このような独自性を解明する従来の主な説は、作家太宰の実生活に即してその思想や人間観を解き及ぼそうとする傾向にあり、生身の作家像解明に集中するところがあった。それは彼の作品の主人公が、限りなく作家その人と同一視される特色にも原因があり、ほとんど私小説作家扱いされてきたことと関係がある。

しかし金氏は、従来の以上の説に対して、文学本来の可能性をより普遍的な人間の価値観に基づく観念として押さえ、主人公と作家を切り離して解釈することを試みた。そのために中期世界の中でも、特に『新釈諸国噺』と『お伽草紙』を対象を限定し、そのパロディ化の描写方法に込められた太宰の倫理意識を、日本人の根源的価値観として普遍化して解釈することによって、従来の中期世界解釈に新視点を提示しようとしたもので、この点は注目され評価されるべきである。

その日本人の根源的価値観とは、太宰自身が言及した「日本の作家精神の伝統」でもあり、この精神の解明をまず『新釈諸国噺』を中心に行い、その展開として『お伽草紙』の異界への志向をユートピア志向としてとらえて論証しようとした。従来これらのパロディ風の作品については、戦時下の批判や、「笑い」さらには作家自身の自己投影といった解釈が多くなされたが、原典と太宰の描写との比較照合を行い詳しく分析しながら、金氏は、太宰のオリジナリティとして、人間としての価値観に結びつくテーマ、①何が駄目であり、②何を求め、③何を捨てるべきかを設定し、①については嘘、②については信じる力、③には欲と我儘をあげ、ありのままに素直になっ

て人と向き合い生きることとまとめた。この結論は、時代状況や作家の実像などにとらわれない文芸の自立性と自律性、その可能性を求める視点として確かに有効ではあるが、一方では、いかにも日常的、常識的一般道徳に帰着するものでもあって、問題の掘り下げ方に弱いところも認められる。当然批判も起こり得るところであろう。しかしそれは価値観の多様性に根差す問題でもあって、このような常識的結論に回帰することこそ、逆に文芸の可能性にとって意義があるとも考え得る。

次に金氏は『お伽草紙』について従来の研究史を踏まえ各作品が起承転結に構成されている点について検証し、原典との比較照合を行い、最後に異界訪問にテーマを収斂させたうえで、前記の根本的倫理観に加えて、ユートピア志向と水による精神の浄化のモチーフを新しく解釈した。その前提として、『新釈諸国噺』で明らかにした倫理的テーマ、嘘、信じる力、などについて新しく「親和の情」のテーマを展開して諸作品の関係を跡付けた。ここでも原典との詳しい照合が行われているが、周知のように対象は伝説説話に基づくものが多く、テキストそのものの限定が困難なため、話の基本構造に付け加えられた太宰の独創を追及することになった。このうち特に「舌切雀」の爺さんの解釈で、爺さんが一国の宰相になったことを、彼の計画ととらえる視点など注目すべきものがある。

金氏の以上の論説は、原典との詳しい比較照合、従来の研究史に基づく新しい視点の発見、など学界に寄与するところもあり、博士の学位論文として認められると判断する。